



第一次・第三次取入口を隧道の中から見たところ。内側から土のうでふさがれている。



大正初年の第一次取入口



市ふるさと応援隊隊長
中央大学名誉教授
小口好昭氏

那須疏水を未来に残していくため、みんなで考えることが必要——

那須疏水は、明治18年に開削されて以来、相次ぐ災害に見舞われ施設の改修に次ぐ改修の連続でした。現在の那須疏水土地改良区を中心とする組合員の方々が、文字通り命を賭して維持してきました。平成6年度に完工した那須野ヶ原総合開発以後は、那須野ヶ原土地改良区連合と所属の土地改良区との協同によって、総延長330kmにおよぶ水路が良好に維持され、農業用水と飲用水が安定供給されてきました。

那須疏水は、2017年に世界かんがい施設遺産に登録されました。しかし、少子高齢化、農家数の減少、耕作放棄地の増加や土地改良区の財政悪化などにより、大規模な農業水利施設の維持更新は全国的に大きな問題になっており、那須疏水も例外ではありません。那須塩原市の発展は、那須疏水あってこそです。郷土の遺産を人、組織、資金面からどのような方法で維持してゆくか、広い視野から検討する組織作りが必要であると思います。

住民たちだけでなく、全国から集まった高い技術を持った職人たちも多く携わっている。そんな中でも、隧道を担当したのが福島の安積疏水の工事を行った大分県からの石工集団。特に蛇尾川や熊川の地下を横切る伏越の工事では、切石やセメントを用いる技術を存分に発揮した。本幹水路完成の翌年、明治19年には第一から第四までの各分水路が完成した。

豊かな水を送り続ける

各分水路が完成すると、疏水の維持管理は国から民間団体の那須水組に移された。その後、明治36年から那須疏水普通水利組合、昭和27年からは那須疏水土地改良区が維持管理を行うようになった。疏水の維持管理には大変な労力を要し、西岩崎にある取入口に至っては、洪水などの影響で、明治38年と大正4年に、水門の位置を変更している(※2)。現在稼働している取入口(西岩崎頭首工)は、昭和51年に完成したものの、そこから取り入れられた水は、先人たちの想いを受け継ぐように、現在も潤し続けている。



薩尾川サイホン出口(上横林)



本幹水路(西岩崎)



第一分水口(東原)



不毛の大地を潤す

長らく不毛の大地であった那須野が原。その大地を潤した那須疏水。今では「世界かんがい施設遺産」に登録されているこの疏水を、作るために奔走した先人たちの足跡を追う。

大正4年に第一次取入口があった場所に作り直された第三次取入口

水を得るための執念

那須疏水が開削される前、栃木県令の鍋島幹により発案された大運河構想は、遂に日の目を見ることはなかった。そして、この構想で実際に地調査を行っていたのが、後に那須疏水開削の功労者となった印南文作、矢板武の両氏だった。彼らは、大運河構想が立ち消えとなった後も、大水路の必要性を政府要人に対して何度も請願し続けた。明治16年から18年にかけて計6回、特に17年には4回も請願のために上京している。そして彼らの熱意が功を奏し、明治18年、かんがい用水路である那須疏水掘削の許可が下付された。工事の起工式は同年4月に烏ヶ森で行われ、5カ月後の同年9月には西岩崎から延びる本幹水路(約16km)の通水式が三島で行われている。

先進技術も取り入れた開削工事

起工式から通水式までわずか5カ月という短期間で完成した本幹水路。その背景には、印南・矢板両名が、許可の出る前年(明治17年)に、銀行から5千円を借り入れ、西岩崎付近で隧道(トンネル)の試掘を行っていたことが関係している。また、那須疏水の工事には近隣の



やいた たけし
矢板 武

※1 現在の相場で約数十億円。
※2 水門は明治38年に当初の場所から150mほど上流に新設されたが、大正4年に元の場所へ再度作り直されている。

いんなみ じょうさく
印南 文作

栃木県議会議員。那須疏水開削の功労者で、水路の必要性を政府に陳情し続けた。後に那須開墾社長、下野新聞社社長などを歴任。



那須野が原開拓を牽引した那須開墾社の初代社長。那須野が原の開墾事業に取り組む傍ら、矢板武とともに那須疏水の開削に尽力。